

興味深い資料の数々

『相馬御風宛書簡集Ⅲ』紹介

金子 善八郎

一、
糸魚川歴史民俗資料館（相馬御風記念館）は、所蔵する著名人の相馬御風宛書簡を解説出版している。

平成十四年（二〇〇二）『相馬御風宛書簡集』第一集——歌人・詩人・俳人——を、平成一八年（二〇〇六）に第二集——小説家・評論家・劇作家・翻訳家——を出版し、今回（平成二〇年度末）第三集——芸術・芸能・音楽・出版・宗教——を出版した。

第三集は、六十四人、封書四一四通、葉書三四八通、合計七六二通の御風宛書簡を収録している。

最も古い書簡は、明治四十三年（一九一〇）二月一日の書簡で、新しいのは御風没年の昭和二十五年（一九五〇）までのものだが、大部分は昭和三年の御風宅類焼以後のものである。

各分野の代表的な人の名を挙げれば、芸術の画家では、石井柏亭から始まり、錦木清方、郷倉千鞆、竹久夢二、津田青楓、土田麦僊、中村岳陵、林武、安田靉彦、横尾深林人、そして横山大観など二十九人。工芸では、内島北朗、

河合卯之助、北大路魯山人、広川松五郎、本間琢斎の五人。彫刻では北村正信、沢田政広、矢崎虎夫など四人。写真では岡田紅陽と浜谷浩、芸能では市川右太衛門、大河内伝次郎、新内の岡本文弥、舞踊の藤蔭静枝など五人、音楽作曲では、中山晋平、弘田龍太郎、小松耕輔の三人。宗教では暁鳥敏、上杉涓潤、梅原真隆、草繁全宜、木村秋雨など七人。出版では佐藤義亮、嶋中雄作、野間清治など六人。いずれもその道で著名な人々である。

これらの大部分の人は、御風の東京時代に交流のあった人々で、糸魚川退住後の人は少ない。

書簡の内容をみると多くは良寛、良寛研究にかかわるもので、他は、作詞・作曲、出版関係と、家族、知人に関するものである。

『相馬御風宛書簡集Ⅲ』は、第三集の解説「地方の時代」の先駆者「相馬御風の後半生、書簡編、書簡の解説、書簡目録で、上製本カバー付、七五〇頁、頒布価格五千元。

次に、良寛関係で靉彦と魯山人の書簡を、作詞作曲関係で晋平書簡を、出版関係で嶋中書簡を、その他で藤蔭の書簡を紹介する。

二、
文化勲章を受章した日本画家安田靉彦の書簡については、すでに昨年の

「洗心」（第十八号・08・5・8・御風会）に紹介しているので、ここでは概略のみにする。

靉彦の御風宛書簡は、封書八十九通、葉書二十二通、合計百一十一通と多く、大正七年（一九一八）から御風没年の昭和二十五年まで三十年余にわたっている。

御風が、『大愚良寛』（大正七・五・26・春陽堂）を靉彦に贈呈したのが二人の交流の発端である。御風宛の最初の靉彦書簡には「此度は高著大愚良寛壹部御惠贈を忝うし」とある。

その後、出雲崎の佐藤吉太郎耐雪が、良寛生家跡に良寛堂の建立を発願したとき、御風は、協力者支援者として靉彦を耐雪に紹介し、靉彦が良寛の遺跡めぐりに来越したとき、御風は耐雪とともに同行案内をしている。

また、大正八年、御風が編集した初めての本格的な「遺墨集」の装丁、題簽を靉彦が引受けている。

こうした交流の中で、「関西紀行」「良寛賛鵬斎筆良寛和尚肖像」「橋物語」「布留散東」「橋屋過去帖」など、良寛遺墨を発見入手し、その情報を頻繁に交換している。

なお、靉彦は、御風夫妻の要望によって、三男咭を内弟子にしている。

北大路魯山人が、糸魚川の御風宅を三度も訪れ、一度は手づから御風に料

理を作って供したことはあまり知られていない。訪問は昭和十三年二月一日、昭和十三年七月二十日（推定）、昭和十三年八月五日の三回。その際の魯山人の書簡は五通ある。訪問の目的は、御風所蔵の良寛遺墨を見せてもらい、御風の見解を聞くことであつたようである。

魯山人は、披露される一点一点に感嘆の声をあげ、ますます良寛への「信仰を厚く」したといい、「良寛之真偽鑑別ハ今後に残されたる大事業ニ候」と書いている。御風は、その魯山人を稀に見る秀れた鑑賞家、理解者といい、「推奨するに躊躇しない」と述べている。

三、

周知のように御風は、早稲田大学校歌「都の西北」をはじめとして二百以上の校歌を作詞している。その他童謡、歌謡、新民謡、国民歌、国歌社歌、邦楽など膨大な数になる。その多くを作曲したのが、「カチューシャの唄」（大正三年）以来の友人中山晋平である。晋平の御風宛書簡は、封書二十四通、葉書八通、計三十二通。

晋平は、「利鎌の光」について「例によって字脚やアクセントの関係で少し御無理をお願いしたく」「うたふ」がふしの具台で「ウタフ」と第一音ウにアクセントが来ますので（中略）